
1 2

YARIM

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

12

【Nコード】

N5082D

【作者名】

YARRIM

【あらすじ】

光・闇・水・炎・風・土・知恵・知識・月・森・精霊・力。12
個の王家の力をめぐって壮大な物語が始まる。

プロローグ

王家の力…

それは、神が人間に与えた超人的な力。

「光」「闇」「水」「炎」「風」「土」「知識」「知恵」「月」「森」「精霊」「力」

12個の力はそれぞれに光と闇の力を筆頭に二つに別れ、世界をも飲み込む戦をした。

怒った神は、光と闇の力を取り上げ、平和を愛する、ある民族の血にその二つの力を刻み込んだ。

そのときに神は言われた。

「お前達の民族の血が途絶えぬのなら、この力は永遠にお前達の血の中で眠り続ける。」

しかし、もしも、お前達の血が減って行き、最後の一人になってしまったのなら、力はその最後の一人の中で目覚める。

最後の一人は、光と闇の力のどちらかを選び、司り、己の血でその力を存続させて行かなければならない。」

数千年が経ち、光と闇以外の10個の力は、それぞれが一つの国を持ち発展を遂げていた。

そして、いまや、失われた光と闇の力は、その存在さえ公には忘れ去られていた。

第一章：悪魔の孤児院・#1

異常な日常。

そこは呪われていた。

暗い暗い、果てしなく暗い場所…。

どくんどくん

心臓の音が暗闇に響いていた。

彼女、セレカは暗い暗い小屋の隅にいた。

恐怖に瘦せた体を震わせて、息を潜めて隠れていた。

彼女の隣には、体をセレカにぴったりとくっつけて、小刻みに震える見知らぬ少女がいた。

セレカは嫌な感じはしなかった。

見知らぬ少女という方が、一人でいるより全然ましだった。

一人ではその恐怖は耐えがたかった。

「いや…、いやだあ…。来るよお…！」

少女はセレカの洋服を手で強くつかみながら、最小限の声の大きさを叫んだ。

少女の震えが一層大きくなる。

セレカはその少女を横目で見ると、優しくその小さな体に腕を回し

た。

すると、少女は少し落ち着いたのか、絞り出す様な声でセレカに呟く。

「あ……あたし……。こ……こわい……。こわいよお……。」

セレカは震えながらも、できるだけ落ちついて話しかけた。

「大丈夫、大丈夫だから。」

それしか言えなかった。しかし、少女はそのセレカの言葉に祈る様に何度も何度も頷いた。

「あなたの名前は何？…私はセレカ…」

セレカがそういうと、少女は震える唇で言った。

「あたしは」

その時だった。

バンツ！！

激しい音と共に小屋の扉が開き、外の光が一気に暗闇に入り込む。

あまりのまぶしさにセレカは目が一瞬くらんだ。

「い
いやあ
あああ
あああ
あああ
あああ
あああ
あああ
あああ
あああ
！！！！！！！！」

少女が断末魔のような叫び声をあげた。その瞬間に立ち上がり小屋を発狂した様に走り回る。

しかし、扉には『あいつ』がいる。
セレカは唾を飲んで、シルエットだけしかみえない『あいつ』を見つめた。

「見つけた。」

美しい声だった。

透き通る様なその声にセレカは一瞬、思考が溶けそうになった。
でも、それは天使の声でも何でも無い、死神の声なのだ。

『あいつ』は少女を指さした。

すると、脇にいた兵士ふたりが走り回る少女を軽々と持ち上げる。

「ひいひつ…、ひいひひ…」

少女は言葉にならない奇声を上げたが、兵士の腕は少女の細い腕に強く食い込んで動きを完全に封じていた。
そして小屋の外へと連れて行かれる。

セレカの目は徐々に光に慣れてきていて、次第に『あいつ』の姿も見える様になってきていた。

この世の者とは思えないその女の美しさにセレカは唾を飲み込む。

「何も言わないのですか？」と、扉の女がささやく。「あの少女、連れて行ってしまうのですよ。以前のあなたならー」

「うるさいっ！！！！！！」セレカは興奮した様に叫んだ。「うるさいっ！！うるさいっ！！！！悪魔！！！！死神！！！！！！人殺しっ！！！！！！」

しかし、言葉はあまりにも無意味だった。

扉の女は鼻で笑った。

「うふふ…、そんなに震えて…。まるで行き場のない捨て犬のようですね。しかし、うれしいですね…。私の存在があなたをそんなに支配してるなんて…。あなたを恐怖で狂わせる事が出来る何て…。」
「そういつて女がセレカにゆっくりとした足取りで近づく。「あなたの恐怖に支配された声…。とても素敵…。」

そういつて、女は座り込んで動けないでいるセレカの顎を手でつかんだ。

「い…や…!!」

セレカはそう言ったが、体がいうことを聞かなかった。

「忘れないでセレカ様、あなたは特別なのですー。」

そう女が呟くと、セレカの顎を放して、女はセレカに背を向けて、外へと出て行った。

セレカは瞳に恐怖と憎悪の涙を溜めながら、今まで目の前にいた美しい女、ロシア公国の王女ヘルヴァの去って行く背中を見つめていた。

セレカはずいぶんと長い間、小屋の中で動けずにいると、遠くで誰かの断末魔が聞こえた。

ふと彼女の脳裏に先ほどの少女の怯えた顔が浮かんだ。

セレカはただ、暗い小屋の中でその声を聞く事しか出来なかった。

#2

ロシア公国―、知恵の力を司るロシア神が築いた国。

セレカはこの孤児院に住んでいた。

女王ヘルヴァの父親である先王デロンドが始めたこの孤児院は、国が経営しているもので、親の無い子、捨てられた子、経済的な問題で育てられない子など、世界各国から集め、そして育成していた。成長し、孤児院から出た者はほとんどがロシア城に仕えていた。

ロシアの民は、この孤児院のことをロシアの誇りと思い、それを築き上げたデロンド王、そして亡き王の後を継ぎ、存続させているヘルヴァ王女の事をとて立派に思っていた。

しかし、誰もこの孤児院の中で実際何が行われているか等は知る由もなかった。

先王デロンドは狂っていた。

彼は残虐を好み、血を好んだ。

彼がこの孤児院を設立したのも、この孤児院の子供達を使い、殺戮の余興を楽しみたかったからであった。

先王デロンドが病死をしても、事態は何も変わらなかった。

ロシアの直系の「知恵」の力を受け継ぐ者として王座についた、彼の二人娘の長女、ヘルヴァ王女は先王に勝る残虐さを持っている女だった。

むしろ孤児院の悪夢は酷くなった様に思われた。

ヘルヴァは不定期的に孤児院にやってきては、大規模な殺害をしていた。

子供達を孤児院の中央広場に集め、その中央の大きな台座で、まるで見せしめるかの用に行われる虐殺を、子供達は『処刑』と名付け

ていた。

その『処刑』の対象となる子供達は、いつもその場でヘルヴァが適当に決めていた。

単にヘルヴァと目があっただけでも対象として選ばれる立派な動機であつたし、逆に視線をそらしていてもその対象と選ばれる事があつた。

その『処刑』の残虐さに耐えきれず、見る事も拒み、中央広場に集まらず、隠れる子供達もいた。

しかし、ヘルヴァは隠れている子供がいると、必ずといっていいほど、それを言い当てた。何故かはわからないけれど、それは、彼女がひきついでいる『王家の力』と関係があるのだ、とある子供がいつてたのをセレカは聞いた事が会つた。

だから、子供達は、絶対に隠れず、『処刑』を常に見ていた。

見つかった場合、通常よりも惨い方法で命を奪われるのを皆知つていたからだ。

『処刑』は、孤児院の子供達に絶望と恐怖を植え付けた。

その夜、セレカはふと夜中に目をさました。

背中が汗まみれ、胸は大きな音をたてて脈うつていた。昼間のことが脳裏に蘇る。

セレカは隠れても殺される事がなかった。

その理由が何故かは彼女には知る由もなかったが、理由は彼女にとつてはどうでもよかった。彼女は殺されないのだ、その事実だけで充分だった。

だからといって、他人が『処刑』で目の前で殺されて行くのを見続ける精神的な強さを持っている人間なんていない。

だからセレカはよく隠れていた。見つかつては殺されないのを知つ

ていたから。

しかし、今日は誤算だった。

隠れるセレカを見て見知らぬ少女が付いてきてしまったのだから。恐らく、あの少女も耐えきれなかったのだろう、『処刑』を見る事に。

――でも…、私のせいじゃない。

セレカは固く目をつぶって、顔を埋めた。

セレカはいてもたってもいらなくなつて、寝静まっている子供達を起こさない様に小屋を出て行つた。

外にでると、風邪が強くて、血の香りがツンと鼻をついた。

香しい様な、悲しい香り。

外は真つ暗で、そして静かで、セレカは取り残された様な気分になった。

…一体いつまで続くの…??

セレカは暗闇に孤児院の誰もが抱いている疑問を投げかけた。死んでしまった方がましに思える現実を前に、浮かぶ疑問。

何故自分だけ殺されないのだろうか。

それはセレカを時に苦しめた。

セレカは悲しい面持ちで静かに寝静まつた孤児院を見渡した。

高い高い塀が周りを囲み、この孤児院の出入り口は一つしかなかった。

それは、18歳を迎え成人した少年少女が出て行く出口でもあり、希望に溢れた子供達が連れてこられる入り口でもあり、ヘルヴァが

『処刑』を行うためにやってくる出入り口でもあった。

それはそのまま、ロシア城の庭へと繋がっているのか、出入り口の背後には立派なロシア城が威圧的にそびえていた。

セレカは、孤児院を見渡す様にして建っているロシア城を見上げた。そしてヘルヴァの美しさを思い出して身震いをする。

黒く長い髪に赤い唇、透き通る様な白い肌、吸い込まれてしまいそうな緑色の大きな瞳。

女の自分でさえも見とれてしまう様な美貌。

しかし、中身は狂っている王女。

あそこにはヘルヴァがいる…。

そして「彼女」も…。

セレカは強い眼差しでロシア城を見つめた。

#3

次の朝、セレカは兵士達の大きな声によって叩き起こされた。

同じ小屋の子供達も眠い目をこすりながら緩慢な動作で起き上がって行く。

そして、セレカはまだはつきりとしらない頭でいつものように一列に並んだ。

小屋のドアが開いているため、身をきるような冷たい風が血の香りと一緒にセレカの肌を攻撃した。

他の子供達も寒そうに体をさすっていた。

そんな中、兵士達に促される様にして二人の少女達が小屋に入ってきた。

一人は甘栗色の短い髪の毛の、活発そうな女の子。

もう一人は、白いワンピースを身にまとった、大人しそうな育ちの良さそうな少女だった。

新入りというヤツだ。

兵士はその二人をセレカ達の前に並ばせた。

「新入りだ。ここのルールなどを教えてやる様に。」

それだけ言うと、少女達を小屋に残し、兵士達は機敏な動作で小屋のドアを閉めて出て行った。

甘栗色の髪の毛の少女は兵士達が出て行くのを見てから元気よく挨拶した。

「あたし、タモア！皆よろしくね！」

彼女の満面の笑顔に、既にいた子供達は心の影を隠す事ができなかった。

誰も彼女の元気な挨拶に答えない。

そんなセレカ達の様子を不思議そうにタモアという少女は見つめた。少し空気の悪い場を和ませる様に、白いワンピースの少女が呟いた。

「あ…あの、私はパータといいます…。皆さん、色々この孤児院のことを教えて下さいね。タモアさんも宜しく御願います。」

少女が愛らしい笑顔で微笑んだ。

「…今のうちだよ。」

その笑顔に方眉をあげながら吐き捨てる様にそう呟いたのは、セレカより1歳年下の17歳でこの小屋の古株、アンナ。

「え…？」

パータは目をぱちくりさせながらアンナを見つめた。

アンナはパータに近寄って睨む様にして言った。

「そんな風に笑ってられるのも今のうちっていったんだよ！」

アンナは怒っているようだった。

そんなアンナの怒りに影響されて、小屋で最年少の少年クルトは泣き出してしまった。

パータは呆気にとられたように、アンナを見つめた。

流石のタモアも困惑した様子でクルトとアンナを交互に見つめている。

「アンナ。」セレカはいたたまれなくなって、そう呟いてアンナの肩に手をのせた。しかし、アンナはその手をいらついた様に払い落とす。「止めてよ！裏切り者！！！」

アンナは厳しい瞳でセレカを睨みつけた。

パータとタモア以外の他の子供達もセレカを睨みつけた。

セレカは何も言えなかった。

彼らは知っていた。

セレカが殺されない事を。

そして、それを逆手に取ってセレカが度々『処刑』の恐怖から逃げている事も。

だから、セレカは同室の子供達全員から嫌われて度々いじめを受けていた。

セレカは振り払われた手を握って俯いた。

彼女には何も言えなかった。何も言う権利がなかった。

しばし、小屋に沈黙が流れたが、それを遮ったのは新入りのタモアだった。

「ちょ…ちょっと…、いきなりケンカ…？止めてよ…。」

っていうか、ちょっと、パータとあたしはこの状況がのみこめてないんですけど！？

自己紹介ぐらいしてくれたっていいんじゃないの？」

怒った様にタモアがアンナに言うと、アンナは顔をしかめながら

「そうね…。」

と呟いた。

そして、目を真っ赤にしているクルトの近くでしゃがみ込んでクル

トを抱きかかえると、俯きがちに呟いた。

「この子はクルト…、この小屋で一番幼いの。

あたしは、アンナ、そこにいる卑怯女よりも1コ下で17歳。」

パータとタモアはその言葉に顔をしかめて一瞬セレカの方をみた。セレカは下に俯いたまま、唇を強く嚙んでいた。

そして、アンナに続いて10人の子供達が自己紹介が終わり、残りはセレカだけだった。

セレカが口を開こうとした時、アンナがすかさず割り行った。

「あとは、その卑怯女だけ。

名前は覚える必要はないよ、卑怯女とでも呼んであげればいいんじゃない？

本人だって喜ぶでしょ。」

アンナの冷たい口調にセレカは何も言えなかった。

そんなセレカにパータが近寄った。

「ちょっとあんた、その女に近寄らない方がいいよ！」

アンナがそういうのもパータは聞かなかった。

パータはセレカの顔を覗き込む様に微笑むと優しく聞いた。

「お名前は何とのですか？」

もちろん、このパータの行動にアンナは肩眉をピクピクと引きつけた。

「ちょっと、あんた！」

しかし、パータに近づこうとするアンナを抑えたのはタモアだった。

「何すんのよ！」

アンナは怒った様に自分の左腕を握って抑えている小柄な少女を睨みつけた。

「あのさ、アンナさん、あんたがそういう風にヒス起こしてあのコに八つ当たりするのもいいけど、あたし達もそれに巻き込まないでくれない？」

タモアは無表情で言った。タモアは間違ったことを言ってるわけではないのは、アンナにもわかっていた。アンナは悔しそうに唇を噛むと吐き捨てた。

「あ、そう！わかったわ！じゃあ、ココでのルールやら何やらも全部あの女に聞けば？みっちり教えてくれるんじゃない？でも言うておくわよ、あなたもあなたも、」アンナはタモアとパータのことを指さす。「あの女を恨む事になるわよ！」

そういうと、アンナはタモアの手を振りほどいて、他の子供達を外に促し、小屋の外へと出て行ってしまった。

小屋にはタモアとパータ、セレカの三人が残された。

木造の小屋の屋根の隙間から優しい朝の光が三人を照らしていた。

タモアはアンナ達が去って閉まった小屋のドアを見ながら溜息をついた。

「いつも、あんななの？彼女。
あれじゃ恋人もできないね。」

タモアはおどけた様に笑ってみせた。
パータはセレカの側で微笑んだ。

「皆さんいなくなってしまうましたが、これでお名前がゆっくり聞
けますね。」

セレカはおずおずと顔をあげた。
タモアとパータは汚れのない笑顔で笑っていた。

「私は…、セレカ。
アンナより一つ年上の１８歳です…。」

「へえ、セレカかあ。いい名前してんじゃん、よろしくね！」

タモアが無邪気な笑顔でにーっと笑う。

「宜しく御願いますね、セレカさん。」

パータも優しく微笑んだ。

「ねえ、でもセレカ、あんた１８歳なの？」とタモア。「この孤児
院は１８歳になれば出なきゃならないって聞いてたんだけど。」
そう言いながら近くのベッドに腰掛ける。

セレカは一瞬遠い目をした。
しかし、すぐにパータとタモアを見つめた。

「そう、普通はね。18になれば皆出てく。でも、笑っちゃうよね、私はまだこの孤児院にいるの。」

パータは不思議そうに首を傾げた。

「この孤児院の責任者の方にそのことを言えば出してもらえるのではないですか？もしかしたらセレカさんのことを見落としているのかもしれない。」

ここを出ればロシア城で雇って頂けると聞きました。孤児院を出た後の生活も考えて頂けるなんて、とても素敵な孤児院ですね。」

セレカは首を振った。

「ううん…、見落としてなんていない…。」

私は18歳を超えてるって知られてて出してもらえてないの。

それに…、ここはあなた達二人がおもってるような素敵な所でも、ロシアの誇りの孤児院でも何でも無い。」

セレカの言葉にタモアとパータは目をぱちくりさせた。

二人の無垢な顔を見てセレカは全てを話す必要性を感じ、重い口を開いた。

4

ホコリが小屋の中を舞っていた。

タモアは、甘栗色の髪の毛をいじりながら、ホコリを目で追う。そして、パータとともにセレカの次の言葉を待っていた。

「…。」

セレカが戸惑っていると、パータが呟いた。

「さっき…、この孤児院に入ってきたとき、思ったんですけど…。
ここは独特の香りがしますね。」

するとタモアがパータを見る。

「あ、あんたも気付いてたんだ？あたしも気になってたの。なんて
いうか、鼻を突く様な香りがするね、この孤児院。」

パータはセレカを見つめた。

「あの香りは…、どこかでかいだ事があると思っていました。
でもさっきは解らなくて…。
…今、思い出しました。」

タモアは不思議そうにパータを見つめた。

「血だよ。」

そう呟いたのはセレカだった。

パータは驚いた様子もなくセレカをひたすら見つめた。
タモアはパータとは対照的に驚いた様にセレカに聞いた。

「チ？」

セレカは頷く。

「濃い血の香り。この孤児院の土に染み付いてるの。」

タモアは理解不能といった顔つきでセレカを見つめた。

「何故？」

パータが優しく聞いた。

セレカは俯きがちに呟いた。

「ヘルヴァ…。あの女は狂ってる。」

あの女の父親デロンドもそうだった。

あの王家は狂ってる。

血を見て、嬉しそうに笑うの。」

タモアが思わずベッドから立ち上がった。

「意味わかんないんだけど…。」

え、ということ？」

セレカは二人を小屋のドアへと促した。

そして、ドアを少し開ける。

自由時間だと言うのに、無駄に歩き回っている子供達は一人もいない。

彼女達の視界に台座が入る。

「あそこは、【魔の広場】って皆呼んでる。

あの台座は【処刑台】。

ヘルヴァは気が赴くままにこの孤児院にやってきては、子供達を全員あの魔の広場に徴集するの。

そして、その場で子供達を選んで一人一人、他の子供達の前で殺して行くの、あの台座の上で。」

「…は…??」

タモアは半ば怒ってる様に笑って扉から後ずさった。

パーティは無表情で扉の隙間から見える台座を見つめていた。

「え…、だつて…、ヘルヴァ王女様は、このロシアの民全員から慕われてんだよ？」

凄く美しくて、立派で…、王家の直系の力を継ぐロシア神の末裔として…、皆から慕われてんだよ？」

え、何、言ってるの？」タモアは不気味に笑った。「でも、冗談にしてはさ…、ちょっとたち悪いよ…。」

え、何、新入りはそうやって皆で驚かせようって魂胆でしょ？え、意味わかんないし。」

でもセレカは笑わなかった。

「嘘じゃない。

今まで何人も死んだ。

あの台座の上で、皆に見つめられながら。

ヘルヴァに殺されて行つたの。

ここは孤児院なんかじゃない。

ヘルヴアのための余興の場。

私達はヘルヴアの余興の道具、それだけのために毎日ここで生かされてるの。

嘘じゃない。」

セレカはなだめるようにタモアに近寄った。

しかしタモアは避ける様にセレカから離れ怒鳴った。

「ふざけないでっ！そんな面白くない冗談、本当に止めてよ！何にもおもしろくないっ！！」

すると、ふと、パータが小屋の扉を開けた。
風が一气に入ってくる。血の香りと共に。

「ああ…。」パータは風を感じながら呟いた。「風が泣いてる…。血の匂いを運ぶ風はとても可哀相…。」

不思議なことをいう少女をセレカは不思議そうに見つめた。
タモアは、風の香りを感じて確信した。
と同時に彼女を吐き気と嫌悪感が襲う。

「閉めて…！！閉めて…！！」

狂った様に叫ぶタモアを見つめながら、パータは冷静な顔つきで、扉を閉めた。

「…気持ち悪い…。」

タモアはぐったりとした様にベッドにうなだれた。
すると、パータがセレカに近寄ってきた。

「…あなたは落ち着いてるね…、パータさん…。」

セレカがそういうと、パータは悲しそうに笑った。

「落ち着いてなんていません…。」

ただ実感も湧かなくて…。

でも信じてないわけではありません。

セレカさんの目を見れば…、嘘ではないことぐらいすぐにわかりましたよ。

しかしやはり理解しろと言われても…難しいです。

なんだかあまりにも…。

…。

だって…私…、ここに職を求めにきただけなのに…。」

「え、職？」

セレカが聞いた。

「…私は幼い頃に捨てられて、里親のもとで育ちました。

一人だちするために、里親のもとを離れようと思って、…それで、この孤児院を出た者はロシア城に務められると聞いたので…。

ロシア城で仕事が欲しくて、この孤児院に親元を離れて入ってきたんです。」

「ロシア城がそんな魅力的だったの？」

セレカが聞くと、パータは少し笑った。

「そうそう王家の力を継ぐ人のもとで働ける事なんて、ありません

から。」

セレカは何も言わなかった。

タモアがベッドに寝転がりながら大きな溜息をついた。

「結局…、あたしはツキがなかったのかなあ。」タモアは悲しそうに笑った。「あたしさあ、実はロベラで盗賊やってたの。」

ロベラとは、ラシアの隣にあるロベラ公国のことで、王家の「知識」の力を代々継いでいる国だった。

突然の話にセレカとパータはタモアを見つめた。

「あたし、へまやつちゃって、捕まっちゃって…。」

あたしみたいな孤児は皆ここに送られてた。

更生施設なんだっていつてね。

でも、何か違ってるね…。

更生施設も何も無いのかな…。

ロベラの役人はそれを知って、あたしみたいのをここに送り込んだのかな。」

セレカは何も言えなかった。

沈黙が部屋を包んだ。

ゴーン… ゴーン…！！！！！！

突然重苦しい金の音が孤児院全体に響き渡った。

と同時に、セレカの顔からみるみる血の気がひいていく。

「何、何？」

タモアはベッドから起き上がって混乱した様に辺りを見回した。
パータは小屋の扉に近づいて、外を見る。

他の小屋から一斉に黒い葬列のように子供達が出てきていた。
表情は暗く、重たい足取りで子供達が向かう所は…、一つだった。
パータは思わず呟いた。

「徴集命令…？」

「へ？」

タモアは気が抜けた様にきいた。

セレカは青白い顔で二人に呟いた。

「…あれは【魔の広場】に行く合図…。
ヘルヴァが来る…。

始まる…、【処刑】が…始まる…。」

5

扉の隙間から【魔の広場】へと集まって行く子供達を見ながらタモアは焦った様に言った。

「どうして、皆行くの!？」

隠れたりしちやえばいいじゃない!?!?

あたし!、そんな残虐な見たくない!」

「ダメ!」

セレカは言った。

心のどこかで何も知らない二人に申し訳なさを感じながら。

「ダメ! ! 隠れても、必ず見つかる!

ヘルヴァはそうということがわかるの!

隠れて見つかった子は、本当に惨い方法で殺される! !

だから行かなくちゃ! !

隠れちゃダメ! ! !

必ず見つかって殺される! ! !」

「そんなことあるの! ?

だってあんな大人数の子供達がいるのに、隠れてる子供がいるなんて把握しきれはるはずが無いよ! !」

タモアは半ばパニックになりながら叫んだ。

「いえ! ! !」それをなだめる様にパータが静かに呟く。「聞いた事があります! ! !。強い魔力をその体に宿している者は、他人の気とい

うものを感じ出来るとのことでした。恐らく、ヘルヴァ王女は、他人の気を察知する能力に長けているのではないのでしょうか。」

「そんなあ…。」タモアは力なくその場にうずくまった。「…いやだ…。…行きたくない…。」

セレカはタモアの近くに寄って彼女の細い肩に手を置いた。

タモアはセレカの手が小刻みに震えているのを見逃さなかった。

しかし、それに対して何かをいうこともなく、タモアは立ち上がった。

「…行き…ましょう。…」

パータが静かにタモアに呟いた。

まだ見ても無いのにタモアは顔を真っ青にしながらパータの後を付いて行く。

「セレカも行こう…。」

付いてこないセレカのことをパータとタモアは小屋の扉の前で振り返った。

セレカは出来る事なら、自分だけ逃げてしまいたかった。

とてもじゃないけれど、見たくなんてなかった。

しかし、二人はセレカを置いて出て行く気配もなく、彼女は血の気のひいた表情で頷いて二人に付いて行った。

魔の広場では、数百という数えきれないほどの子供達が赤く血塗られた【処刑台】の周りを囲んでいた。

大勢の子供達が集ったと言うのに話し声はほとんど聞こえず、それは異様な光景だった。

子供達の大群の周りを、冷たい切る様な風が逃げ場を隠す様に吹き荒れる。

「…すっごい数ね…。」

タモアが思わずぼそつと呟いた。

最後の方に出て来たから三人は大群の後ろの方にいた。

そこからは子供達の頭ばかりで【処刑台】はほとんど見えない。

「…見えないじゃないの…。」

少し強がりの様にタモアが言うと、三人の前にいた10代半ばの少年がタモアを睨みつけた。

しかし、すぐに服装の新しさから新入りだと察したのか意地悪そうに笑った。

「どこにいてもすぐに特等席に行く可能性があるんだぜ。ひひっ。」

タモアはそれに何も反応しなかった。

異様にぴりぴりとした空気が子供達の間を流れていた。

突如ラッパの音が入り口から聞こえた。

それは、ヘルヴァが入ってくる合図だった。

そのラッパの音と同時に、子供達の大群を監視するかの用に、百人近い兵士達が子供達の周りを囲んだ。

そして、一層大きなラッパの音と共にヘルヴァが子供達の群衆の間に開いた【処刑台】までの道のりを優雅に歩いて行く。

【処刑台】までついたヘルヴァはあたりを満足そうに見回した。

「あれが…ヘルヴァ王女…。」

ふとパータが呟いた。

赤いドレスがヘルヴァの白い肌に美しいほど映えていた。

「…綺麗な人…。」

パータはそう続けて黙り込んだ。

ヘルヴァは台座の上から兵士に何やら指で指示を出していた。その指先は一つの小屋をさしている。

恐らく死に急いだ子供が今回もいたのだろう。

それを察知した二人の兵士が小屋へと足早に走って行った。子供達はそれを横目でみながらも、ヘルヴァから注意をそらさなかった。

セレカは重い面持ちでヘルヴァを見据えた。

いつ見ても、吸い込まれそうな美しさをまとっている王女。

血を愛する残虐さはむしろ彼女の美しさに磨きをかけているかの様な錯覚さえ覚えるほど、まるでバラの用に美しい。

そんなことを考えていると、早速二人の兵士がいつの間に帰ってきたのか、力なくうなだれた少年を抱えて処刑台に上って行った。

つれてこられたのは幼い12、3歳ぐらいのあどけなさの残る少年だった。

「自殺志望だな、あいつ…。」

目の前の少年がぼそつと呟いた。

パータとタモアは、恐ろしいながらも、処刑台を見つめていた。

他の子供達は、既にうずくまったり、目や耳を塞いでいる子供達がほとんどだった。

セレカは久しぶりのこれから始まるであろう惨劇に動く事さえま
ならなかった。

前の子供達がうずくまり、小さいながらも、三人の視界に処刑台が
入ってきた。

つれてこられた少年は、処刑台の中央に立っている丸太に兵士達に
くり付けられる。

兵士達が役目が終わり、処刑台からおりると、代わりに、処刑人が
三人処刑台の上ののった。

黒い布で顔を隠し、その表情などは一切読み取れない。

その様子を楽しそうに見つめるヘルヴァは、何やら処刑人に指示を
出しているようだった。

すると、ロープで固定され、動かなくなつた少年の右足に処刑人の
一人が、巨大な鉄の固まりをくり付けた斧を振り下ろした。

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！！！！！」

言葉にならない悲痛な叫びがあたりに響いた。

処刑台は遠いのに確実にセレカ達の耳までそれは届いていた。

少年の右足、ちょうど膝から下はボロボロになり、切断されてはい
ないものの、避けた皮膚からは止めどなく血が流れ、所々骨が痛々
しくつきでている。

「う……う……。」

少年は声にならない声をあげた。

ヘルヴァが指示を出すと、処刑人が今度は彼の左足の膝下を狙って
鉄のかたまりを振り下ろす。

「ひぎゃあああああああああああ！！！！！！」

再び少年の声が響いた。

セレカは震えながらも処刑台から目が放せなかった。

パータとタモアはあまりの展開に思考が停止しかけていた。

右足よりも衝撃が強かったのか、左足は皮膚一枚で繋がっている。少年は意識を失った様にうなだれた。

そこへヘルヴァが少年の近くへと歩みを進める。

少年の下の方の真つ赤な泉など、何も気にしない様子で入って行く。

彼女が着ている真つ赤なドレスの裾は、その血の泉に浸っていたが、逆にそれが幻想的な景色に見えて、子供達は目を見張った。

愛おしそくに、憎たらしそくに、ヘルヴァは少年の頬に手を伸ばすと、優しく撫でた。

「苦しい…？」

ヘルヴァは甘くささやいた。

少年は、ふともうろつとする意識の中で目の前の美しい顔を見る。

それは天使の様に見えて、彼はもう死んだのかと、一種の安堵感さえ覚えた。

しかし、その安堵感は一瞬にしてぬぐい去られる。

「ヴァイオ」

その甘美な声でヘルヴァは少年に呟いた。

その瞬間、少年は激しい痒みを体中を感じた。

「あ…ああ…」

少年は耐えがたい痒みに声をあげた。もはや両足の痛み以上に痒みが彼を苦しめていた。

彼の皮膚は次第に真っ赤になり、徐々に水ぶくれのようにふくれて行った。

「あー！ ああー！！！！！！！！きー！！！！きー！！！！き……き
いー！！！！！！きあああああああ！！！！！！ひゃああああ
あああああああ！！！！！！！！」

少年は尋常じゃない体の異常に奇声を上げる。

しかし、助けられる者等誰もいない。

むしろ、異常を感じた前列の子供達は逃げる様に他の子供達をかき分け、処刑台から遠くへと移動しようとしていた。

異常を察した子供達が次から次へと離れようとするが、大勢の子供達に囲まれ、それは安易に出来る事ではなかった。

子供達は、押され、倒され、処刑台の周りはパニックに陥った。

ヘルヴァは、少年から離れると、パニックに陥り逃げようとしている子供達を楽しそうに見つめていた。

「ねえ…、何がおきてるの？」

タモア達からは、前列の方で何がおこっているのかよく把握できなかった。

ただ何か尋常じゃないことが起きている事だけはわかっていた。まわりの子供達も不安そうに話し合っているが、今いち把握をしていないようだった。

ただ全員、胸に漠然とした不安を感じていた。

処刑台の上の柱にくくり付けられた少年は先ほどからは想像出来ないぐらいに青紫色になり、肌はふくれていた。

彼の顔は目は飛び出て、唇も異常なほど大きくなっていた。

固定するために縛られたロープが彼の膨れた肌に痛いほど食い込んでいる。

しかし、彼の膨張は止む気配がなかった。

「…あれは…。」その処刑台上の彼であつた物体を見つめていたパータがふと呟いた。「逃げましょう…！！！！ここにいては危険です！」

「へ？」

気付けばパータはセラカとタモアの手をとって処刑台とは反対方向に逃げ出していた。

パータに触発された様に、いつきに周りの子供達も悲鳴をあげながら処刑台とは反対方向に逃げ始めた。

周りにいた兵士達は子供達を止めようとするが、いつきに大勢が散ろうとして止めるにも止める事ができなかった。

パータ達は兵士を上手くかわしながら走っていた。

「ちょっと！！！」

タモアが逃げながら必死にパータに聞いた。

「逃げないと…！！！！！！あれは…！！！！！！あれは…！！！！！！！」

その瞬間……

パンッ！！！！！！

風船が割れる様な音と共に、処刑台から黄ばんだ液体が四方に飛び散った。

6

ペチャ

それは嫌みな音と共に、逃げ回る子供達に降りかかった。
処刑台から遠くにいたセレカ達の周りは被害は少なかったものの、
隣を逃げていた少女に降りかかる。

「いやあ……!!」

それと同時に少女はその場に転んだ。
後から来る子供達に踏み倒され、蹴られ、セレカ達の随分と後方へ
と消えて行ってしまった。

パータは一番近い小屋のドアを開けると、勢い良く中にタモアとセ
レカと共に入り込む。

他の子供達も小屋につられて入り込む。

小屋にはセレカ達を含めて20人近くの子供達が息を切らしていた。
外では子供達の混乱の悲鳴が聞こえていた。

セレカはその同じ小屋の中にアンナの姿を見つけた。

思わずアンナとセレカの目があう。

「……今回は逃げなかったの？」

アンナは息を切らしながら皮肉を呟いた。

セレカは何もいわなかった。

パータとタモアもアンナの姿に気付いたようだったが何もいわな
かった。

そのかわりにタモアが息を切らしながら呟く。

「…ぜえ…はあ…、何…、あれ…。」

「…。」「パータも息を切らしながら呟いた。」「…あれは魔術…です…。…実際にみたのは初めてです…。」

「魔術…。」セレカは呟いた。度々セレカや孤児院の子供達は、ヘルヴァが不思議な術をするのを目撃していた。今回のあんなふうに膨れるのは初めてだったが。

「…出ましょう。」パータが突然セレカとタモアの手をとって、扉の方へと歩み寄る。

「えっ…？何で…！？」タモアが呟くと、パータはある少女を見つけていた。

つられてタモアとセレカもその少女に視線を向ける。

少女は明らかに様子がおかしかった。

苦しそうに俯いていると、次第に倒れ込んだ。

小屋の子供達もその異変に気付いたのか、その少女に視線が集まる。

「うつ…、うつ…！」

少女は声にならない声を絞り出した。

「あああ…！…！！！」

そう少女が叫ぶと、徐々に少女の肌が赤くなっていく。

「…な…何…！？」

子供達は全員察知していた。その少女にも処刑台の少年と同じ事がおきているのだと。

「感染者です！！！！！！この小屋から出ましょう！！！！」パータは確信したようにいうと、扉を勢い良く開けて小屋の外にでようとした。同じ小屋にいた子供達もパータの言葉に一齐に外に出ようとしたが、

「ひいっ！！！！」

思わず小屋から出ようとして足が止まる。

外は地獄だった。

何人もの、少年少女が、肌を赤黒くして地面にうずくまっていた。彼らの体が紫色に変わって行き、どんどんと膨らんで行く。

処刑台の周りには数えきれないほどの子供達が風船の様に膨れて転がっていた。

処刑台は黄色い液体で彩られ、ヘルヴァは何故か一切の汚れを身にまとう事無く余裕の表情でその様子を処刑台の上からみつめていた。

「液体に触れてはいけません……！」パータは小屋の子供達に呼びかけた。「感染された人は皆、大きく膨れて爆発します。液体が四方に飛び散っても、かからない所に逃げます！」

そう言っただけパータは一気に処刑台と反対側に走り出した。

同じ小屋の子供達も一齐に小屋からでてパータを追う様に走り出す。それをとめる兵士達はいなかった。

セレカは周りを見ながら不思議に思った。兵士達は外にいたというのに一切あの、液体に感染された様子もなく、そこら中に爆発するであろう感染者が散らばっているのにその場から逃げる気配もなかった。

「こつちにいけば安全だよ!!」

同じ小屋にいた少年がパータ達の前に出て、走りながら一点を指さした。

「この孤児院の中で処刑台から一番遠い場所だよ!」

同じ小屋にいわせた子供達は必死にその少年を筆頭に、処刑台から一番遠い孤児院の場所を目指して走った。

後ろから度々風船の弾ける音がしたが、誰も振り返らなかった。

孤児院の隅であり、一番遠い場所についた20人近くの彼らは、その場所に一番近い小屋の影に隠れ座り込んだ。

皆あまりの恐怖と疲労感に啞然としていた。

話す者は誰もいなかった。

息を整えていると、遠くから連続してものすごい数の破裂音が響いた。

しかし、彼らのいる場所からはその光景をみることもできないし、液体がとんでくる気配もなかった。

セレカは息を整えながら周りを見つめるが、彼ら以外に子供達は見えなかった。

他の皆はどうしたのだろうか。

小屋の中にいてあの液体を免れているのだろうか…。

セレカの頭を色んな考えが巡ったが、答えが出る気配はなかった。

異常に長かった大量の破裂音も止み、沈黙があたりを包む。

「…あれは…何…？」その沈黙を破ったのはアンナだった。その目には光はなく、いつもの強気な姿勢もなかった。ただ恐怖に放心した様に俯きながら誰にともなく呟いた。

「…あれは…。」そんなアンナを見つめながらパータが沈黙に呟いた。「恐らく魔術…です…。」

「魔術…」アンナはその聞き慣れない響きに眉をしかめた。

パータは誰にともなく話し始めた。

「…王家の力を発動する事によって、発する超自然的な力です…でもあれは…」

「…あんな怖い力が、ロシア様の力なの…？」ふとその会話を聞いていた見慣れぬ幼い少女が呟いた。

パータは首をふった。

「…彼女はロシアの力を継いでいます…、しかし…、しかし、あの魔術は…。」

「…どうして、あんな恐ろしい力をあたしたちに使うの…？」少女は泣きながら聞いた。パータには答える事ができなかった。

しばし、彼らは動けずにその場に座り込んでいた。

処刑台に行く事もできず、だからといって変に動き回ることもできなかった。

遠くで風船の割れる音が再度連続ですごい数響いた。
それは2次被害が出た証拠だった。

誰も何も言わなかった。

随分と時間がたったであろうが、うずくまる子供達にはそれさえ気付かなかった。

全てが夢だったのでは無いかと思うほどの静けさが辺りを包んだ。

セレカは小さな声で思わず隣に座り込むパータに聞いた。

「ねえ、さっき何て言いかけたの？」

「はい？」パータが力なく聞きかえす。

「さっき…、魔術についてなんか言いかけてたでしょ。」

パータが少し困惑した様に考えてから、セレカを見つめた。

「…私は、興味があつて、自主的に魔術に関する勉強をしました。
本で読んだのですが…、この世には既に失われてしまった魔術があるのだそうです。」

周りの子供達は黙りながら彼女の話に耳を傾けていた。

「魔術は一般的には王家の力と同じ、10種類の属性しかないとい

われています…。

しかし…、中には幻の魔法と言われていて、その10種類のどの力にも属さない力があるらしいのです…。

太古の昔の文献を読んだのですが…、その文献にあった魔法の一つとそっくりなのです…。

体が赤黒くなり、膨れ、弾けると、毒が四方に飛び散り、それを浴びた者は感染され、感染者がいなくなるまで被害は続く…村一つをも崩壊させる魔法だと書いてありました…。

あまりにも信じられなくて…覚えています…。」

「…王家の10種類の力に属さないってどういうこと？」

アンナがふと話しに割り切る。

タモアは脱帽した様に話を聞いていた。

「王家の10種類の力は、王家の者しか持っていないわけではありません。

この地上にそれと同じエネルギーが散らばっているのだそうです…。

王家の者は、それを管理し、操る力があるだけだそうです。

なので、とある力を継ぐ王家が絶えてしまえば、この地上からもそのエネルギーが消え、自然界に大きな影響が出るのだとされています…。」

ふーん、と子供達が呟く。

「術者は、術を発動するのに必要な一つの力を、彼の周りからかき集めて術を発動するのだと言います。

それは王家がその血にその力を刻み、管理して、そのエネルギーが地上に満ちているからこそできる技です。

その力を管理する王家がないと、そのエネルギー自体地上にはないのだと言います。

すくなくとも、人が扱える状態としては存在していないのと言います…。」

「…じゃあ、どの力にも属してないってことは、人間には使えないエネルギーが発動に必要ってこと？」タモアが聞く。

「だから幻の力…。」とアンナ。「じゃあ、ヘルヴァ王女が使えるはずがないじゃない。」

パータは難しい顔をしてアンナを見つめた。

「そのはずなんですが…。」

「パータが知らないだけで、多分10種類の王家の力に属してるんじゃない？」

パータが読んだのとは別の魔法だよ、きっと。」

タモアが無表情で呟くと、パータは腑に落ちない表情で頷いた。

沈黙が辺りを包んだ。

しかし、それは次の瞬間、かき消される。

「こんなに生残るだなんてねえ。」

ふと響いた甘い声。

皆その声の持ち主を知っていた。

声のした方向へ視線が集まる。

ヘルヴァが立っていた。

何十という兵士達を後ろに構えて。

叫ぶ気力も無かった。

新入りのパータとタモア、そしてセレカ以外は皆死を覚悟した。
彼らの顔を絶望の色が支配する。」

「女王陛下、どうか残りは私達に御任せ下さい。」

兵士の一人、恐らくその場の責任者なのであろう者がそう呟いて、
ヘルヴァの前に跪いた。

と同時に残りの兵士達もその場に跪く。

ヘルヴァはその兵士を見つめると考え込んだ様に顎に手を当てた。

「…必要ないわ、この人数なら。」

そういつて、ヘルヴァは目の前の20人近くの子供達を見つめる。

「連れて行きなさい。」

「はあ！」

何十と言う兵士が一斉に敬礼し、立ち上がると、子供達に取り囲む
様に近寄った。

ヘルヴァはその様子を見つめると、そのまま子供達を背にしてラシ
ア城の方向へ歩いて行き、子供達の視界から消えて行った。

抵抗する子供は誰一人いなかった。

手際良く、彼らの細い腕にロープがまかれて行く。

「歩け！」

子供達はロープで拘束されたまま、困惑しながら一列に並ばされる。
そして、兵士達に囲まれながら、重い足取りで歩きだす。

ヘルヴァが消えた方向へ。

子供達が歩き出すにつれて、徐々に処刑台が目に入ってきた。
と同時に子供達は固唾をのんだ。

処刑台、そしてその周りの数十メートルの土地は彩られていた。
真っ赤な真っ赤な血で。

どこにも先ほどの黄色い液体は見えないが、そのかわりに血が四方
に飛び散っていた。

異常な量の血が。

小屋の隙間からも血が流れ出ているのをみると、小屋に隠れた子供
達も次々感染して、小屋の中で爆発したようだった。

その景色に思わず腰を抜かしたのはタモアとパータだった。

新入りの二人にはそれ以上は耐えられなかったようだった。

促されても立ち上がらない二人を兵士達は軽々と担いで行った。

数十人の兵士達と20人あまりの子供達は、その死臭漂うその異様
な景色を無言で歩いて行った。

困惑する子供達は、彼らがある一点、この孤児院の唯一の出入り口
を指して歩いているなどまだ気付く者はいなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5082d/>

1 2

2011年1月27日02時52分発行